

---

# 食い意地のはった、あたし

虹乃 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食い意地のはった、あたし

### 【Nコード】

N9607Y

### 【作者名】

虹乃 咲

### 【あらすじ】

ネタバレの可能性があるため少しの情報のみで、  
食い意地の張ったあたしが色んな人と出会って過ごした日常を綴ったもの。カニバリズム的な表現があるので駄目な人は読まないほうが・・・なるだけ淡々とさせていますが気を付けてください。あ、人は食べちゃ駄目ですよv v

味見って一口だけなんて嘘でしょう（前書き）

この小説は短編にしようと思案中  
多分10話くらいかな？

味見って一口だけなんて嘘でしょう

ああ、何がいけなかったのだろう。

いや、明らかに喰い意地なんですがね、頭の中では冷静に自分の喰い意地の汚さを罵りながらも目の前のよく見知った人物を威嚇する。

「グルルルルルッ!!」

「・・・ヴェニス、君はいつたい」

目の前に広がる薔薇色の髪を見ながらも、あたしの意識は必死になって逃げ口を探す。外に出ることができればあたしの勝ちだ。ここからおさらばして、また一からやり直せる。

しかし、こういった気配に敏感な男の隙をつけるだろうか、いやできる。あたしなら。

「なにを笑っている」

あたしは壁を背に剣の鞘で喉元を抑えられながらも身体を震わせる。

「貴様っ・・・!」

「私じゃないの」

あたしは赤い瞳にこれでもかと涙を浮かばせるが、さすがに隊長殿さんは顔色一つ変えない。

ちえー、固いなあ。

「ならばこれはどう説明する」

ちらりと隊長さんが向けた視線の先には真っ赤な衣装となった騎士隊の服を着ている男が倒れている。

そして、あたしの口元の赤。まあ、あたしの真紅の瞳よりは大幅おちるけど。

「生臭い。ヴェニス、この男を食べただろう」

「・・・」

「貴様は何者だ。魔の者が」

喋りたくとも喉元に押し付けられていたら人間のままじゃ話せない。まあ、歯には男の物と思われる衣服の切れ端と肉の残骸が挟まっているから言い訳なんて無意味に思えるけれど。

だけど、あたしはくくと喉を鳴らし、嘎れた声を出して答える。

「魔だと、そんな、低俗な奴らと・・・一緒に、する、な」

いつも顰め面の隊長さんの顔が更に剣呑な物となる。目を細くして唇はきゅっと結ばれている。

「ならば答えてもらおう、お前が何者かを」

そう言うなり、あたしが気づかない程の速さで刀身を抜き、あたしの腕に斬りかかる。

「ぎゃああああああ！！」

い、痛い。やはり隊長とあって腕が良い。今、躊躇いもなく確実に左腕の神経を切った。その痛さにあたしは床を転げ回る。

「お、女の子には優しく、しなさいって習、わなかった？」

脂汗を額に浮かべながらも軽口を叩くあたしに隊長さんはバツサリと切り捨てる。

「お前が本当に女だったら少しは寛大な処置を見せよう」

「一応、性別は女、よ？」

「どうだかなっ！！」

そう言いながら一気に間合いを詰めてくるが、この間合いがあなたの命取り。

あたしが頬を膨らませて口から炎を一気に放つと同時に隊長さんは横へと避けて驚愕を浮かべる。

「む、避けないでよ」

あたしは眉を寄せて隊長さんを見る。

「せっかく痛みがないようにしてあげようと思ったのに」

先程斬られたばかりというのに、あたしの息は上がっていないし、腕の血は止まっている。

「お前」

隊長さんが気づいたが、あたしはそんなことより口元についた不味かった男の血を裾で拭き取りながら涎を垂らす。

あ、絨毯汚しちゃった。この片づけは大変だろうな。血の染みは落ちにくいし、あたしの炎で少し焦げてしまっている。

まあ、いっか。だってあたしの目下の問題はただ一つ。

「ねえ、隊長さん。食べていい？」

この精霊の加護をおおいに承けている隊長さんを食べることなんだから。

「くっ・・・！」

あたしが風を使った速さで隊長さんの攻撃をかわしながら着々と近づく。

風の攻撃により隊長さんの身体は浅い傷ができる。

「ああ・・・」

そこから香り出る豊潤な匂いは極上。味見なんかしなくたって分かる。

絶対、おいしい。

「ぐっ・・・！」

もともと遠征の帰りで疲れていたのだろう。疲労しきっていた身体はあたしの攻撃により悲鳴をあげる。

剣を落とした隊長さんの四肢を風で縛って自由を奪う。

「はあ、どうやって食べようかな」

一飲みなんて勿体ない。血を全部抜き取ってからにしようか、いや全部飲んじゃ骨と皮だけで味気ない。やはり血は半分だけ飲んで、あとは手から食べて次は足、そして頭、最後に胴体にしよう。

ああ、何て素敵な考えかしら。

呻き声を上げている生き物に近寄る。

駄目よ、駄目。帰ってから食べないと。

あたしは獲物を巢に持ち帰って誰にも見られないようにするのだ。そうやって、こそこそするのはまるで犬のよう。けれど誰にも見られないで食べるのが好き。誰だって自分が食べているところなんて見られたくないじゃない。それでもあたし、女の子なんだからさ。

でもでも、ちょっとだけなら味見してもいいんじゃない？

この意地汚さがまた厄介を生むのだが仕方ない。人間、それも精霊の加護を受けている隊長さんが悪い。

小さな舌を出して首から出ている鮮血を舐める。

「はあ・・・」



溜め息が出る程だ。本当に美味。今まで食べた中で最もおいしい。少しの味見だけだったのに、あたしは更に涎が出る。

「どうしよう、いや我慢。ああ、でもあと少しだけ」

目の前のおいしそうな食べ物に対して思う。やっぱり我慢なんて言葉、あたしにはない。

あたしは隊長さんの薔薇色の腰まである長い髪を隊長さんの腰に刺さっていた短剣で一気に切る。はらりと散った髪は隊長さんの顎付近で不揃いな長さで揃った。

「おいしい・・・」

髪にまで生命力が行き届いているなんて優れた副産物だ。

でも髪なんて直ぐに食べちゃって、ご馳走を目にしたあたしには物足りない。

ちらりと隊長さんの瞳を見る。毅然とした態度であたしを睨みつける姿は凛々しいものだ。

多くの女性、あたしの友達もだが、こういった隊長さんの姿にときめくのだろう。

あたしは違うけど。

黒い瞳は2つ。だったら一つ位いいんじゃない？  
じーっと見ると黒い瞳にあたしの赤い目が映る。

「・・・綺麗だな」

「は？」

「お前の瞳はなんて綺麗なんだろうか。まるで空に浮かぶ血に魅入られた月のよう」

この世界の月は赤い。確か月に関した神話があった。人が戦争をし過ぎたために神が流した涙とか。はたまた、人間が神を切った色とか。

この際、どうでもいいけど。

「今更命乞い？」

幾つもの戦場を駆け抜けてきた戦士がそんなんでもいいのかしら。

「いや、私の禍々しい黒色なんかより、ずっと気高く美しい」

「・・・詩人？」

「いや、私の職業はこの国の騎士だが」

・・・天然？

あたしは確かにこの世界で不吉とされる黒色の瞳を覗きこむ。まるで黒曜石みたいで綺麗だと思うけど。

きょとんと首を傾げて鼻と鼻かぶつかる距離まで近寄る。

「そう？　あたしは隊長さんの瞳の方が好き・・・ぎゃあっ・・・！！」

あたしが油断した途端、隊長さんが雀斑ののったあたしの低い鼻

に噛み付いた。

「ば、ばなぜっ！！」

だけど隊長さんの噛む力は強くて、あたしの鼻の骨はいともたやすく砕けた。

「ぐぎゅぎゅぎゅぎやるるるー！」

もう許さない、八つ裂きにしてやると本性が出てこようとする。額に角が出て、瞳は獣のように細く広がる。爪は伸び、白い鱗が肌から浮かび上がる。

「きしゃああああああっ！！」

目は血走り、野太い唸り声をあげて隊長さんを一飲みにしようにと口をあける。

「ふぎやつー！」

食べたいのに、こんなに近くにいるのに今度は幾つもの矢がそれを阻む。

「誰だっ！！」

赤い目をこれでもかと開いて矢が飛んできた方を見ると騎士の奴らが連なる。しかも、各部の隊長や副隊長。

ああ、皆さん、あたしが目をつけていた人ばかり。まあ筋肉隆々の副隊長は除いてだが。

「ヴェニス、ジェシス隊長から離れる」

第一支部の水色の髪をした隊長が吠える。

ああ、食べたい。

あたしが本来の姿に戻れば何の抵抗もできないだろうに。しかし今の姿はただの村娘。

あたしは舌打ちする。たかが女一匹に男20人って。どんだけだよ。

うー、目の前にご馳走があるのに。

「あー、もう」

がしがじと頭を乱暴に掻くと閉められた窓を見上げる。

「次は必ず喰うー!!」

あたしは窓に体当たりして空へと身体を投げ出す。

後ろから悲鳴が聞こえたが、あたしは元の姿に戻って空を飛び立って城を後にした。

味見って一口だけなんて嘘でしょう（後書き）

寒いですね、そーですね！

炬燵がいい♡ミカンがいい♡お鍋がいい♡

## 空腹の先に出会ったものは

あたしは高く高く飛翔して逃げる。

くそう、自分の巣に持って帰って食べるなんて思わなければ騎士達からの攻撃を受けることなく隊長さんを食えることかできたのにさ。

はあと溜息をつきながら自分の巣に帰ろうとしたがふと向きを変える。

そういえば魔力の「ま」さえない討伐隊の奴らが来るから、あたしは王都に行ったんだ。

あんな不味い肉は嫌だな、しかも筋肉隆々の奴らだったから固いし、そのくせお風呂なんて言葉を知らないような連中だったから臭かったし。

巣を変えようかな。この国は一番大きくて資源（人間）も豊富だったけれど、隣の国にも美味しそうな人間もいるでしょ。まあ王宮で仕えていた時にできた友達と別れるのは少し寂しかったけど。あたしだって人間は食えることだけが目的じゃないのよ。お話だってするし、一緒に買い物だって行った。

でも、やっぱり食欲が一番で。

そう結論に達すると、あたしは翼の向きを変えて幅広い運河で仕切られている国境を越える。

でもどこに巣を作ろうか。やはり人も来ない崖近くがいい。1ヶ月に5人程ばかり食べれば生きていけるし、固い男より柔らかい女

の肉の方がいいからな。

子供に姿を変えれば、大抵の女は気を許す。まあ魔力は無いかもしれないけど肉は美味しいし。うん、そうしよう。あたしは眼下に広がる緑を見下ろして静かに降り立つ。といっても静かなってあたしには無縁な話。翼による風圧で木々は薙倒れるし、動物達はあたしの姿を見た途端に逃げ回る。ちよつと動物なんて食べないわよ。小さくてお腹いっぱいにならないし、小さいから捕まえるのも大変なもの。

ま、伝わらなけど。

あたしはそう思っただけで降り立ち、姿を変える。小さな子供。髪は白くて目はやはり赤い。どう見ても一般にはない色だけど、あたしとしてはお気に入りだからさ変えたくないわけ。

そんな変な拘りがあるから人から好奇心な目で見られるんだけど拘りは捨てない。

あたしはぶらぶら当てもなくさ迷う。

人いないかなあ。今日は隊長さんによって1人目を食べようとしたら捕まったら、お腹すいた。

ぐぎゅるぎゅううう。

お腹が空腹を訴える。あたしも減っているのだよ、お腹君。

「はう」

こてん、と青々とした草の上に横たわる。お腹が空きすぎてもう立てない。

一寝入りすれば動けるかも。そう考えて眠りについた。

何やらいい香りが漂ってきたのだ。

盛大な腹の虫が鳴つて、あたしは目を覚ます。目を開けて匂いの方を向くと女があたしに背を向けながら暖炉で何かを作っていた。

「あら、起きたの？」

人が通らない森に倒れていた、どう見ても怪しいあたしなのに女は笑みを浮かべて椅子に座るように促した。

「もうすぐだから、待っててね」



「待てない」

「あと少しだから」

「ふみゆう」

ここでもまた待てを食らうなんて、もともと短気なあたしは更に苛々する。けれども仕方が無いのでガジガジと自分の髪を噛むことにして空腹を紛らわす。

本当は目の前の女を食べようかと思ったのだけど、この女、絶対に不味そうなのだ。優しそうな口調とは反して骨と皮しかない目は窪んでいるのに何故か眼光だけは鋭い。くすんだ灰色の髪は栄養が届いていないようで、ぱさぱさだ。そのくせ死臭がするのだ。女は死んでいないというのは分かる。だがこの臭さはあたしの鼻をひん曲げる程の匂い。

その匂いを鍋から漂う匂いで気を紛らわせることに成功したあたしは未練たらしくも鍋をちらりと見て溜息をついて部屋を見渡す。

小さな部屋だ、多分この女しか住んでいないのだろう。最低限の物しかないし簡素としている。寝かされていたベッドは床で寝ているのと変わらない位硬かった。ま、あたしも土の上で寝ていたから気にはならなかったけどね。

そうこうするうちに、やっと仕上がったらしく女が小さな器によそってくれた。あたしはそれをぺろりと平らげるとお代わりを何度もせがんで鍋一つ空にしてしまった。女の分も食べてしまったようので、この栄養失調の身体には申し訳ないが食べてしまったものは仕方ない。

「美味しかった？」

「うん」

「そう、あなたが食べたのは人間の肉だったんだけど」

女はまるで今日の天気について話すように平淡な声で言ったが、あたしは動揺もせずそのまま返す。

「知ってる」

「・・・」

確かに女が作った料理に使われていたのは人間の肉、それも子供の肉だ。なんとか薬草などを使って人間の肉の匂いを誤魔化していたみたいだけど如何せん、あたしの食事は人間だ。あれほどの美味、人間の味を忘れるはずがない。

「知ってたって？」

「うん」

「あなた、何者？」

「うーん、人間？」

胡乱げな視線が返ってきたが、あたしは子供らしく首を傾げる。瞬きを繰り返して純粹さをアピールしたが嫌なものを見る目が返って来た。

「変な子ね」

「あんたもね。あんたも人間食べてるでしょ」

そうだ、だからこの女は腐臭がする。あたしが人間を食べるのなら何ら問題は無いが人間が人間を食べるとなると話は違ってくる。人間は身体が順応できないのだ。だから死病を患う。そもそも同族を食べて美味しいのだろうか。まあ人間を食べているあたしが言うのもなんだけどね。

「・・・どうして分かったの？」

「だって、あんた臭い」

「・・・嫌悪感は無いの？」

「別に？」

「変わった子ね」

あんたの方が変わってるのに、そう口から出かったが哀愁漂う女には言えなかった。

空腹の先に出会ったものは（後書き）

はい、早くも勘がいい人はヴェニスが何か分かったね？  
ぐ、やるな・・・

まずそんな物は食べたくありません

あたしは結局、女　名前はアイサ　を食べなかった。こんな病気持ちの女を食べたら腹を下すかもしれないし。それにアイサの作るご飯は美味い。少ししか人間の肉を入れてないから物足りないがいつもと違った食事ができて新鮮だった。生でも美味しいが手間加えると更に肉が柔らかくなるのだ。ま、あたしは面倒だからそのまま派なだけだね。

「ね、アイサ。この子供の骨は？」

あたしは骨まで食べることができる、というか食べたい。

「埋めたわ」

「どこに？」

「・・・ヴェニス、あんた骨まで食べる気？」

え、勿論ですがという顔をしたら呆れ顔が返ってきた。

「骨なんて硬くて食べれないわ」

「そう？」

あたしの歯は岩をも砕く。それでも、あたしの歯は欠けたことなど無く、八重歯は鋭い。アイサに骨が埋まっている場所を聞いて土を掘り返した。その場所の土は真新しく、あたしが一かきするだけで容易く掘り返せた。

そこには棺が埋まっっていて蓋を取り除くと10程の人間の骨があった。一番真新しいのはやはり子供の物でまだ肉片がついていて異臭を放っていた。他の骨は既に何年か経っていたのだろう、もう肉は腐っっていて本当に骨だけだ。

あたしはそれらを躊躇なく取るとバリバリと噛み、飲み込む。どの骨も女か子供の物、きつとアイサも女だからだろう、男を殺すことは体格差からできず、自分より劣る人間を選び殺して肉を貪る。

「おいしい？」

あたしが全部の骨を食べ終わるのを見届けていたらしいアイサは食べ終わったのを見計らってあたしに声をかける。

食事中に嫌という視線を感じて食べにくかったこと極まりなかったが後ろを振り返ると何故か称賛のような眼差しを向けてくるのだから、あたしは戸惑う。

「何？」

「私も骨を食べたら長生きできる？」

「・・・無理ね」

そう言った途端にあからさまに溜息をつきながら肩を落とす。そんなに落ち込まれても人間にはこの骨は硬すぎるし栄養を得ることはできないだろう。あたしみたいな生き物だから食べることができる。

「人間を食べたら長生きできるって言われたの？」

ビクリと肩を震わせ感情の無い顔であたしを見る。まるで泥眼のような顔だがあたしには利かない。だって非力な人間よりも、あたしの方が強いんだから。

「なんでそんなこと言うの」

あたしの返答次第ではこの女はあたしを殺しかねない。そういつた雰囲気を探らせるものの別に平気なため、あたしは普通に言い放つ。

「だって人間が人間を食べるなんておかしいでしょ。それにあんた臭いし、病気持つてるでしょ。だからそれを直すためかと思っただけと当たりみたいね」

「・・・そうよ。どの医者も匙を投げたわ。だから私は自分でこの病気の治し方を本で見つけたの」

「そこに書いてあったって？」

「ええ、どうせ同じ人間なのだから同じ治癒力があるはずだわ。私はそれにかけるしかなかったの」

それは藁をも掴む思い、どんなに人が間違っていると言っても私にはこれしか無かった。自分でも最初は人間を食べることに嫌悪し、吐いた。

「けれど慣れは怖いものね」

今ではどのように女、子供を誑かして、どこの肉が一番柔らかいか、どうすれば上手く肉を切り取れるか、どんな料理が合うか全て分かっている。

「ああ、だからあんなに料理が美味しかったんだ」

なるほど、日々の鍛錬の賜なのだ。だがあたしは努力という言葉は皆無のためにそんなちまちましたことなんてやってられない。

「そういうわけ。で、ヴェニスは何で食べてるの？」

「なんとなく？」

誤解しないで欲しいが、あたしも最初は自分に嫌悪していたのだ。人間を食べることに対して。だから最初は動物を食べたり、妖精を食べたり植物にも挑戦した。けれど動物は生臭いし捕まえるにも小さいから一苦労、植物は山一つ分を食べないと満たされないし妖精はすばしっこいから捕まえるのが面倒。たまたま出会った村娘を食べてみたところ、これが極上でしかも腹持ちがいいことに気がついたのだ。それに精霊に加護されている人間は他の人間より美味しいのだ。それからというものの、人間があたしの主食だ。

まあ、今の姿で人間を食っていたら怖いだけだね。  
だが、はたと気付いて口に出す。

「アイサはあたしを食べないの？」

あたしの見た目はひ弱そうな子供、アイサが頑張ればあたしを捕まえることができるかもしれない。食べ物を餌にすれば。



「あんた人間じゃないでしょ」

「前は人間だったかな」

「嘘おっしやい」

「そうだよ」

「そう、どっちでもいいわ。それに今まで独りだったから話相手がいて嬉しいわ。あんたも私を食べないみたいだし」

それには激しく同感する。

だって絶対、まずそう。それが顔に出ていたのだろうか。アイサは顔を顰めて「あんた失礼よ」と言いながらも笑って照れ隠ししていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9607y/>

---

食い意地のはった、あたし

2011年12月20日17時50分発行